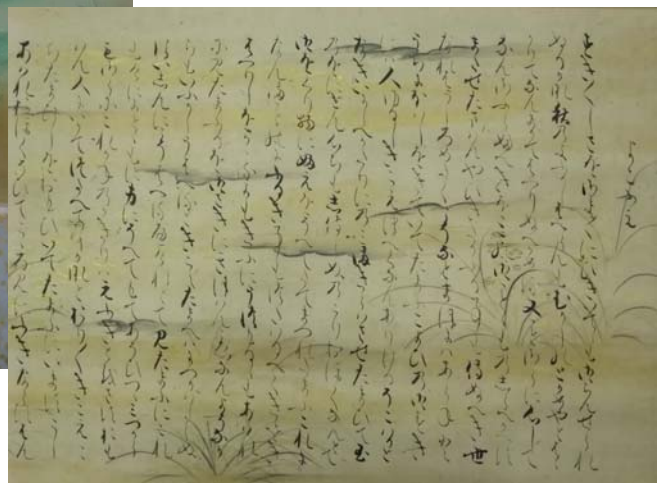
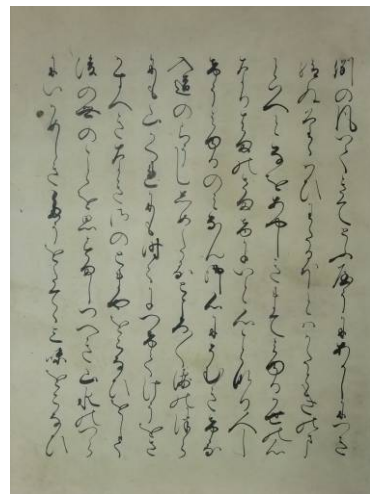


第 124 回貴重書展

みやびの風景

—源氏物語洛中洛外—



鶴見大学図書館

平成 22 年 1 月 12 日 (火) ~ 1 月 28 日 (木)

後援 紫式部学会・武蔵野書院

みやびの風景 一源氏物語洛中洛外一

展示書目

*=個人蔵

I 源氏絵の四季

- 1 源氏物語絵巻 六条院の紅梅 幽遠斎筆 天保2年(1831)写 卷子本3軸
- 2 源氏物語絵 空蟬と軒端萩の囲碁 江戸時代中期写 額装1面
(参考) 扇の草紙断簡 室町時代後期写 台紙貼1紙*
- 3 源氏物語絵 野宮を訪れる光源氏 室町時代末期写 軸装1幅*
- 4 源氏物語絵 橘小島の鷺 室町時代後期写 軸装1幅

II 野と山の風趣

- 5 絵入源氏物語 夕霧 承応3年(1654)刊 袋綴60冊
(参考) 源氏物語断簡 横笛 金銀下絵 秋山公道旧蔵 江戸時代前期写 軸装1幅
- 6 嫁入本源氏物語 江戸時代前期写 列帖装12冊
- 7 龍文刷題簽源氏物語 江戸時代前期写 列帖装54冊
- 8 源氏絵宝枕 正徳3年(1713)刊 卷四欠 袋綴3冊

III 水辺の景色

- 9 源氏物語 絵入小型本 江戸時代前期刊 袋綴60冊*
- 10 源氏小鏡 明暦3年(1657) 安田十兵衛刊 袋綴3冊
- 11 源氏物語歌留多 江戸時代後期作 1組
(参考) 源氏かるた絵合 江戸時代末期刊 袋付1舗
- 12 源氏物語 明石 奈良絵本 江戸時代前期写 列帖装1冊
(参考) 狭衣物語 奈良絵本 江戸時代前期写 袋綴3冊

IV 邸宅と庭園

- 13 源氏五十四帖 早蕨 尾形月耕画 明治28年(1895) 横山良八刊 1枚*
- 14 絵入源氏物語 乙女 万治3年(1660) 林和泉掾刊 横本 袋綴29冊
(参考) 源氏物語五十四帖 一蕙斎芳幾 明治14年 錦栄堂大倉孫兵衛刊 折本2冊
- 15 十帖源氏 六条院・二条院の図 寛文頃刊 袋綴10冊
- 16 源氏物語古系図 巢守三位本 室町時代後期写 折本1冊

絵にいとよくも似たるかな

あけましておめでとう存じます。初春の催しは、源氏物語研究所がお引き受けするのが恒例になっております。源氏物語1000年のにぎわいの、それはそれで意味のあることではありましようが、やはり古典は、世間の流行と関係なく、心静かに、しかも楽しく読まなくては、と思いますので、しばらく源氏物語の展示から遠ざかっておりました。少しお祭り騒ぎのおさまったところで、研究所のお家芸の、その一端をご披露いたします。

そもそも源氏物語研究所の最大の仕事は、と申すのも大げさですが、源氏物語とそれに関連する質のよい古典籍を収集し、書物に即した的確な調査を行うことにあります。大衆伝達手段に乗って華やかに打ち出される言説や、あるいは犀利を装った所謂現代的な議論は、一時人目を驚かすことはあっても所詮根無し草、すぐに次の流行に取って代わられます。時代を超えて学問を支え、豊かな源泉となって研究を潤し続けるものは、古典籍において他に見あたりそうもありません。限られた予算を最大限有効に活用するために、目録を精査し古書肆を訪ね、検討を重ねて書物を集めます。その結果、学界のみならず一般にもよく知られるところの、本学の優秀な貴重書コレクションが形成されました。

今回は、文学の舞台であり、また人間模様の背景でもある自然や庭園のありさまを、物語の中から抜き出してお目にかけることとしました。「はるかに霞わたりて、四方のこずゑそこはかとなうけぶりわたれるほど、絵にいとよくも似たるかな」（若紫）とは、北山に出かけた光源氏の感想です。展示では、絵画化された資料が中心となりますけれども、絵がどのくらい源氏物語の表現を再現し得ているか、つまり「物語にいとよくも似たるか」を考えてくださるのも一興でしょう。また、文章そのものの味わいや筆跡のうるわしさ、書物意匠の卓抜さにも眼をとめていただければ幸いです。

くくだと世迷い言を申しました。とにかくお楽しみ下さい。源氏物語それ自体が、楽しく読める作品なのですから。

平成庚寅青陽中浣日

源氏物語研究所所長

高田信敬

I 源氏絵の四季

『源氏物語』に深い魅力を添える、豊かな季節感。ここには、四季それぞれの名場面を絵画化した作品が並びます。絵師の創意工夫や鮮やかな色彩、あるいは時代を経たもののみが持つ落ち着きを鑑賞してください。

1 源氏物語絵巻 北山の春・六条院の紅梅 幽遠斎筆 天保2年(1831)写 卷子本3軸

薄手楮紙(縦28.6、横約38.0糎)に、原則として『源氏物語』各巻1図を描く。全54図を3巻に仕立てるが、橋姫巻に2図あり、次の椎本巻の分を欠く。継紙状態で伝来し、朽葉色絹表紙と牙軸は当館に入ってから調製である。外題は貞政少登先生(独立書人団理事長)の揮毫。

上巻冒頭に「源氏五十四帖 探幽」と墨書した楮紙(幅約5糎)。汚れの状態から見て、もと端裏書であったものを巻頭に張り継いだのであろう。さらに1紙(幅約28糎)を続けて「五十四帖／引歌／山路露／系図／爪印上／同中／同下／以上六十帖／探幽法印筆／天保二卯年十月中旬／幽遠斎写」の識語。これに従うならば、狩野派の巨匠探幽(1602～1674)の原画を、天保2年(辛卯、1831)に模写したことになる。しかし各々の図柄と「五十四帖／引歌」以下の文言からすれば、**5 絵入源氏物語**を典拠としていることは確実である。探幽が版本の挿絵を範として作画を行うこともありえないではなからうけれども、他に文証なく、ただちに首肯しがたい。

上巻13図・中巻20図・下巻21図の内から、春の展示にふさわしい2場面を選んだ。桜匂う北山での光源氏を中心とする宴(若紫)・咲き誇る紅梅を前に螢兵部卿宮と対座する光源氏(梅枝)である。狩野派の強い描線に、淡い賦彩がよく調和し、さわやかで嫌みのない画面となっている。

2 源氏物語絵 空蟬と軒端萩の囲碁 江戸時代中期制作 額装1面

型押し金箔を雲形にデザインし、上下にあしらった極彩色大和絵(縦57.8、横47.3糎)。金箔散らしの霞は後補らしい。顔料の落剥もなく保存良好、元来は屏風であったか。豪華絢爛の姿が偲ばれる。屏風もしくは障子絵を軸や額、または画帖に仕立てる例はかなり多いので、この種の資料調査にあたっては、現在の形状にとらわれない考察が必要である。絵の全体は純然たる大和絵だが、画中の襖や屏風の絵は狩野派風の唐絵。このような技法の併用は、奈良絵本にもしばしば見られる。

碁に興じる空蟬と軒端萩を、光源氏が垣間見するところ、17歳の夏のことである。源氏から顔のよく見えるのが軒端萩であろう。源氏の脇には空蟬の弟小君が立つ。『源氏物語』の本文に「白きうすものひとへがさね、二藍の小桂だつものないがしろに着なして、紅の腰ひき結へるきはまで胸あらはにばうぞくなり」とあり、軒端萩はかなりの略装であったが、この絵では、整った女房装束の姿で描かれる。

(参考) 扇の草紙断簡 室町時代後期写 台紙貼1紙*

やや厚手の斐紙(縦30.6、横22.0糎)に、ホトトギス・葵・鶉飼を主題とする3つの扇面が描かれ、関連の深い和歌を散らし書きする。いずれも夏を代表する景物である。綴穴跡および汚れ方から見て、列帖装冊子本の丁オモテ面に相当。「ほととぎす」(191)・「わすれめや」(182)・「うかひふね」(251)の和歌は『新古今集』卷三夏に収められる。

『扇の草紙』は現在10点以上の作例が残っており、30首程度の小規模の絵巻から、100首以上に及ぶ大作まで、伝本の数の割に種類が多い。和歌も、勅撰集入集歌を主体とするもの、能や狂言に頻用された未詳歌を含むもの等、様々である。絵もまた略画風に軽い例も濃彩細密な作も知られ、1面あたりの扇の数も一定しない。

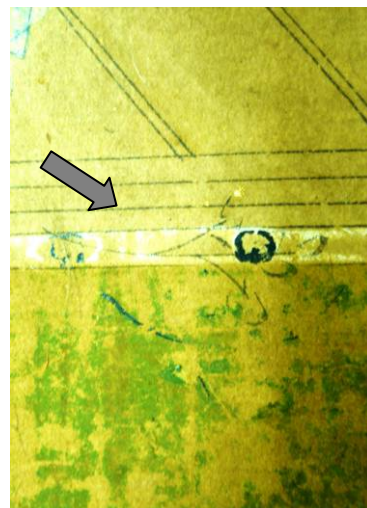
掲出の切は、室町時代後期に遡りうる大型絵本の断片として貴重であり、和歌のあり方や料紙寸法から、高津古文化研所蔵の『扇の草紙』(屏風張り込み)や浄照坊蔵奈良絵本切に近い。素朴な味わいを備えた夏の絵画である。

3 源氏物語絵 野宮を訪れる光源氏 江戸時代初期制作 軸装1幅*

上方に賢木の本文抜書、下方に野宮を描いた源氏物語絵(縦91.7、横38.8糎)。絵そのものは江戸時代のごく早い頃、あるいは安土桃山時代まで遡りうるか。原態は複数の場面を備えた屏風もしくは障子絵であったろう。賢木の本文(大成335・336頁)は江戸時代中期の後補と推され、1枚毎に鑑賞されるようになってから本文の書き入れが行われたらしく、料紙とのなじみの悪いところがある。六条御息所の歌第5句「かさしぞ」(諸本「さか木ぞ」)は珍しい異文。

晩秋9月の色づく木々を点綴し、黒木の鳥居と小柴垣が描かれていて、光源氏野宮訪問の図であることは一目瞭然。従者と源氏とでは明らかに表情の差があり、面貌の描き分けを精細に行ったことが察せられる。衣紋の書き込みや建築物の線引きも丁寧かつ確かな技量を示す。ただし、処々に落剥や料紙の割れが見られ、補筆も少なくない。源氏と几帳を隔てて対座する六条御息所がほぼすべて補筆らしいのは、惜しい。

上方の本文に「さかきをいさゝか折りて…をとめぐがあたりとおもへば／さかき／ばの／香を／かぐはしみ／とめて／こそ／おれ」とある通り、榊の枝を画中に描くのが習いである。本図でも、源氏と六条御息所の間、畳の縁の近くに、顔料は落ちたけれども下絵の墨書きの痕跡がわずかに残っている。



下絵の痕跡

4 源氏物語絵 橘小島の鷺 室町時代後期写 田中塊堂旧蔵 軸装1幅

念入りに賦彩された色紙形(縦26.1、横21.5糎)に、細やかな筆致で薫大将と浮舟を描き、左手に寒々とした冬の宇治川が広がる。匂宮を思って心曇る女と、久方ぶりに山里を訪れた男が向かい合い、複雑な人間模様を紡ぎ出す。しかしながら画面はあくま

で静謐、衣紋や面貌も細やか、渋く落ち着いた作品である。二月の出来事であり、当時の暦では春となるが、貴重書室から適切な冬の軸物を探し出せなかったので、便宜これを掲げる。お許し願いたい。

左上の中州に鷺が立ち、『源氏物語』本文の「山のかたは霞へだてゝ、寒き州崎に立てるかさゝぎの姿も、ところがらはいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはるばると見わたさるゝに、柴舟の所々に行きちがひたるなど」と食い違ふ。しかし「かさゝぎ」（鵲）が鷺となっているのは絵師の誤解ではない。伝本によっては「さぎ」の異文を見ること、またこの「かさゝぎ」を鷺と解する古注釈も存在するからである。

浮舟巻の当該場面を描いた具体例を知らないが、『源氏物語絵詞』（室町時代後期写、大阪府立大学）はこの箇所を抄出しており、絵画化の対象と見なされていたことは確かである。なお『源氏物語画帖』（土佐光吉作、京都国立博物館）の総角と構図・人物描写が似ていることは、十分注意してよいことであろう。旧蔵者田中塊堂（1896～1976）は、仮名書家・古筆や古写経の研究家として聞こえ、手慣れた箱書もなかなか見事である。

Ⅱ 野と山の風趣

詩趣あふれる京都郊外の野山や田園風景は、登場人物の心と響き合い、深い思いを映し出す働きがあります。作品に深い陰影を添える背景は、『源氏物語』の読者を永く魅了してきました。

5 絵入源氏物語 夕霧 慶安3年（1650）山本春正跋 承応3年（1654）刊 袋綴60冊

藍色無地紙表紙（縦27.1、横18.3糎）の中央に素紙題簽を押し、巻名を刷る。本文に匡郭なく、毎半葉11行21字程度。四周単辺内に、雅趣のある大和絵風の挿絵が入る。全226図の労作は、刊行者山本春正の手になるものであろう。春正は当時屈指の蒔絵師であり、山本派の祖。松永貞徳の門に学び、歌人・古典学者としても名高かった。本文54冊に『系図』1冊・『山路露』1冊・『引歌』1冊・『目案』3冊を加えて60冊仕立てとする。夢浮橋末尾に山本春正の慶安3年（1650）跋と「承応三甲午稔八月吉日／洛陽寺町通／八尾勘兵衛開板」の刊記。この書物の影響はきわめて大きく、**12 源氏物語 明石 奈良絵本**も絵入本に依拠した作例である。

見開き左側に小野の山里が描かれ、籬の秋草や鹿、収穫を待つ田など、ひなびた風景が広がる。左端には山の端を照らす夕日。「九月十余日、野山のけしきは深く見知らぬ人だにたゞにやはおはする…鹿はたゞ籬のもとにたゞみつゝ、山田の引板にも驚かず、色濃き稲どもの中にまじりて」と続く文章を忠実に絵画化している。

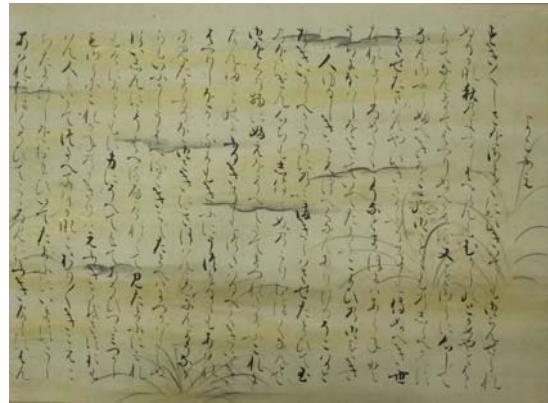
（参考） 源氏物語断簡 横笛 金銀泥下絵料紙 秋山公道旧蔵 江戸時代前期写 軸装1幅

金銀泥にて秋草・土坡等を描いた美麗下絵斐紙（縦29.7、横54.0糎、左より7.6糎の所に継ぎ目あり）に横笛巻（大成1276・1278頁）を抄写。30行22字程度で、本文は三条西家本

系統である。

旧蔵者の箱書に「本阿弥光悦筆 源氏物語横笛抄」(オモテ)、「昭和四十七年改装 公道題〔印〕」(ウラ)とあり、確かに肥瘦の目立つ本阿弥光悦(1558~1637)風の能書ではあるが、一時代下った江戸時代前期、寛文(1661~1673)ころの制作か。秋山公道氏は京都の書家、平成9年92歳の高齢で亡くなった。

秋の野の風趣を料紙の下絵に生かした作例。左端より5・6行目の和歌は、柏木没後の邸宅のさまを「つゆしげきむぐらのやどにいにしへの秋に／かはらぬむしのこゑかな」と詠んでおり、その風情と調和する下絵意匠である。



6 嫁入本源氏物語 江戸時代前期写 列帖装12冊

金泥にて秋草・蓮池・土坡等を描いた紺色紙表紙(縦24.0、横18.0糎)、その中央に具引金泥下絵題簽(縦12.7、横2.2糎)を押し、定家様にて巻名を墨書。本文料紙、斐紙。每半葉九行20字程度、和歌は2字下げ2行書きとし、その末尾は地の文へ直接続く。近衛流に学んだかと思われる手で全巻1筆書写、書き入れなし。絵合・松風・藤袴・梅枝・藤裏葉・夕霧・御法・幻・橋姫・宿木・東屋・手習のほとんどは青表紙本であるが、梅枝巻には河内本独自の異文が混じる。また手習巻は明瞭に河内本の特徴を示して貴重であるものの、全4括のうち最後の括は蓬生巻1括分が錯綴されており、惜しまれる。装丁から見て、綴じ誤りは早い時期におこったものか。表紙・題簽・料紙等 贅沢な仕上がりの書物であり、貴紳豪商の嫁娶に際して制作された、所謂嫁入本。今回展示出来ないのは残念だが、各冊趣向を凝らした見返し意匠は特筆に値する。

洛中の八宮邸が焼け、宇治の山荘へ移ったところ、見開き右頁3行目以下「宇治と云所によし／ある山ざとも給へりけるにわたり給」、左頁4行目以下「いとゞ山か／さなれる御住家に尋まいる人なし」と見え、山深いわび住まいが語られる。

7 龍文刷題簽源氏物語 江戸時代前期写 列帖装54冊

薄藍にて鱗形・市松・七宝繋ぎ等を刷り、金銀泥の装飾を施した瀟洒な斐紙表紙(縦15.4、横15.5糎)の升形本。表紙中央に金泥龍文刷題簽を押し、定家様の筆跡で巻名を書く。桐壺・花散里・薄雲などは題簽の表面が剥離。概して表紙よりも題簽の痛みが甚だしく、古い外題の襲用も考えられる。見返しは銀切箔を密に蒔き、金銀の霞引きを施した気品高いもの。本文料紙、斐紙。每半葉10行15字程度、和歌は2字下げ2行書きとし、その末尾は地の文へ直接続く。数筆の寄り合い書き、若菜下末尾に貼り付けられた紙片には、一条院尊覚の筆跡とある。それに従えば、後陽成天皇皇子尊覚(1608~1661)の手となる。尊覚の筆跡を確認しえず当否の判断は出来ないが、時代相応の典籍ではある。本文は青表紙本系、肖柏本・三条西家本に近い。

光源氏と空蟬が再会した逢坂山の秋。関屋巻の見開き右頁4行目から「九月つごもりな

れはもみぢの色＼こ／きまぜ霜がれの草むらおかしう／見えわたるに」と綴られる。隣は、薄藍色鱗形地に金泥の山と霞を描いた若紫巻の表紙。

8 源氏絵宝枕 正徳3年(1713)刊 巻四欠 袋綴3冊

縹色地に草花・梅樹・霞等の鍍泥下絵紙表紙(縦26.4、横18.0糎)。中央に朽葉色題簽(縦17.6、横4.4糎)を押し、子持杵中に「源氏絵宝枕」と刷る。振り仮名は「げんしゑほうまくら」。本文、毎半葉10行21字程度(印刷面縦約19.5、横14.4糎)。巻頭に序文2丁。『源氏物語』各巻の紹介記事を右面に、四周単辺(縦19.5、横14.4糎)で囲んだ古雅な絵を左頁に配し、見開きで1帖分となる。第1冊15丁、第2冊15丁、第3冊17丁。第4冊欠。

他本によれば「正徳三年巳ノ正月吉日 大野木市兵衛」の刊記を持つ。万治3年鱗形屋版の『源氏鬢鏡』の内容を受け継ぎ、版面構成と図柄とを変えて出版したもの。『源氏物語』の簡略な説明に発句を加えて楽しむ、趣味性の強い書物である。伝本希少。掲出本は、第1冊最終丁ウラが須磨巻の紹介であるために第2冊は須磨巻の絵から始まり、巻頭部は見開きで1巻分の原則からはずれる。第2冊最終丁ウラは白紙なので、第3冊は見開きを1巻分に当てる合理的な形式に戻る。このことから、2冊仕立てが本来の姿であったかと推され、その各冊をさらに分冊して4冊とし、最後の冊を失ったのが現状とすることになる。

展示箇所は第2冊の薄雲巻、「入日さす峯にたなびくうす雲は物思ふ／袖に色やまがへる」(右頁4行目以下)を左頁で視角化、絵の上方に夕日と山並みが見える。中央には、藤壺中宮を追悼する光源氏。

Ⅲ水辺の景色

暮らしに潤いをもたらす水は、美しい風景を作り上げる力をも備えています。なつかしく、時に激しく流れる川、ゆったりと広がる海。それに松の緑や芦の葉のそよぎが加わると、水辺はいっそう詩情豊かなものとなります。

9 源氏物語 絵入小型本 江戸時代前期刊 袋綴60冊*

濃紺地に雷文・蓮華唐草を艶刷りした紙表紙(縦14.3、横11.3糎)は押発装を持つ原装。中央に金泥斐紙題簽(縦7.7、横2.1糎)を貼り、巻名を墨書する。四周単辺、毎半葉11行21字程度、和歌2字下げ2行書きとし、その末は地の文に直接続く。版心「桐壺 ○一」の如く刻す。5 絵入源氏物語を継承した60冊構成だが、『目案』を『爪印』と改題する。保存は全体として良好、古い木箱入り。

質のよい料紙を用い、濃墨で丁寧に刷っており、版本でありながら1冊毎に図柄を変えた金泥下絵題簽に、一々外題を手書きする特製本。この小型本は、分量の少ない巻を合冊することが多いので、60冊仕立てであることも珍重されよう。掌中愛玩の好ましい典籍である。

楽人を乗せた船が浮かぶ六条院の壮大な池(胡蝶)と、宇治川の川遊び(総角)、および藤の花の金泥下絵(篝火)を展示する。

10 源氏小鏡 明暦3年(1657)安田十兵衛刊 袋綴3冊

藍色無地紙表紙(縦27.2、横19.5糎)左肩に素紙題簽(縦18.2、横2.9糎)を押し、子持枠中に「絵入／源氏小鏡 上(中・下)」と刷る。原装丁・原題簽ではあるが、書物全体に疲れが見られる。本文は匡郭なく毎半葉13行22字程度。版心、文字なし。挿絵は四周単辺(高さ21.5糎)。しかし通常の絵入り本が半丁単位で構成されるのとは異なり、図のある面に3行分本文が入り込むのを例とする。古風な様式か。下巻末尾に「明暦三年丁酉仲秋吉辰／洛陽誓願寺前／安田十兵衛開板」の刊記。

源氏物語梗概書の中で最も伝本数の多い源氏小鏡は、享受史的にも文献学的にもおもしろい研究素材である。掲出本は古本系第1系統に属し、絵を入れた最初の小鏡。この本を受けて、小型絵入り本も刊行される。

玉鬘巻相当部分を展示。大宰府次官の乗る船はさすがに立派な作りであり、堂々と海を進む。素朴な描法ながら人々の顔は表情豊かで、見飽きない。

11 源氏歌留多 江戸時代後期作 1組

銀覆輪の厚紙(縦7.6、横5.1糎)に金揉箔を散らした歌留多。『源氏物語』より各巻1首ずつ抜き出した和歌を、上下句で読札・取札に書き分ける。読札には巻名・和歌の上句・当該巻と縁のある景物、取札は下句の散らし書きとする。54帖分108枚の揃いを緑色地小葵文緞子の帙に入れ、黒漆塗箱に収める。コハゼは銀。贅沢で気の利いた遊び道具と言えよう。

人物をまったく登場させない様式の源氏歌留多は珍しいのではなかろうか。草花・樹木・虫・調度品などを愛らしく描き、顔料の落剥もほとんどない美品。絵札54枚のうちから、水辺が描かれた葵・明石・篝火・藤裏葉・竹河・橋姫を展示、いずれも深い紺青が鮮やかである。

(参考) 源氏かるた絵合

厚手楮紙(縦39.0、横54.0糎)の豊物。中央に琵琶湖と石山寺、その周囲を源氏物語各巻に由来する短冊形の絵54枚で埋める。源氏香と巻名を刷った札を乗せて遊ぶものであった(中野幸一『源氏物語の享受資料』)が、現在その札を欠く。しかし多色刷りの袋が残り、「湖月抄」「源氏かるたゑあはせ」等の文字が見えるのはうれしい。

中央画面左寄りに「洗心斎綾岡筆」の書名があり、池田綾岡(通称奈良屋吉兵衛、1817～1887)の作と判明する。綾岡は団扇絵を得意とし、能書としても知られていた。掲出資料は比較的早印であろう。他に、「江戸日本橋榛原」の朱印を押すもの、明治20年(1887)後刷りも残る。前者「榛原」は、団扇絵を通して綾岡と交渉のあった幕末明治の団扇問屋兼本屋、榛原直次郎であろう。なお綾岡画・榛原直次郎刊行の遊技具に、『ひやくにんしゅまはりすごろく』―「ひやくにんいつしゅ」ではありません―がある。

12 源氏物語 明石 奈良絵本 江戸時代前期写 列帖装1冊

濃紺地に金銀泥下絵表紙(縦23.9、横17.7糎)、その左肩に朱地金泥下絵題簽を押し、「あかし 十二」と墨書。表紙は各冊当該巻にちなんで意匠を替えた、華麗精緻なものである。本文筆者は他にも奈良絵本を書写しており、職業的な書き手であったらしい。当館はツレの

賢木巻を所蔵する。本文料紙、斐紙。毎半葉10行17字程度、和歌は3字下げ2行書とし、2行目はさらに1字下げる。

天地に藍の霞引、濃彩で描かれた奈良絵6面は、すべて**5 絵入源氏物語**の図柄に一致し、本文もまた同様。絵入版本に依拠した奈良絵本であると判明する。奈良絵本から版本が生まれる例も勿論ある。しかしそれとは逆に、版本に基づく奈良絵本も、掲出本の他、長恨歌絵巻・伊勢物語等の作例が知られている。

展示箇所は、住吉明神のさとしにより須磨から明石へと浦伝いする光源氏の、はかなげな小舟を「あやしき風」が吹き送るところ。



(参考) 狭衣物語 奈良絵本 江戸時代前期写 袋綴3冊

秋草・水辺等を金泥で描いた紺表紙(縦16.3、横23.9糎)の横本。表紙中央に朱地金泥下絵題簽(縦13.9、横2.7糎)を押し、「さころも 上(中・下)」と墨書するのは、本文と別筆。見返し、斐紙に金箔散らし・金泥下絵。本文料紙、間合紙。毎半葉13行11字程度、和歌は2字下げ、3行書きとする。墨付き、上20丁・中20丁・下17丁。全体として18図あったと思われるが、中冊の2図が失われて伝来した。

『狭衣物語』は平安時代以来広く愛読され、多様な異本ばかりではなく、中世風に改作したものが残されている。掲出本もそのひとつであり、「むかしきんめい天わうの御時に」から始まる第3類に属す。展示箇所は、九州への船旅。奸計により連れ出された狭衣大将の愛人飛鳥井の姫君は、この後入水する。

IV 邸宅と庭園

源氏物語には、様々な建物や附属する庭があらわれ、善美を尽くした豪邸も八重葎の茂る古宮も、それぞれに大切な役割をもって作品を支えています。ここでは紹介しきれませんが、不気味な「なにがしの院」(夕顔)、あるいは月に照らされた岡辺の家(明石)などのありようを想像してみてもはいかがでしょう。

13 源氏五十四帖 早蕨 尾形月耕画 明治28年(1895)横山良八刊 1枚*

大判錦絵(印刷面縦32.3、横21.9糎)に、故大い君を偲ぶ中の君が描かれる。暗い色調で宇治山荘の庭の荒廃を描き、建物も簡素な表現。中の君の前に、峯の阿闍梨より送られた初蕨の籠が置かれている。画面右上に「源氏五十四帖 四十八」の短冊形と「このはるは／たれにか見せん／なき人の／かたみにつめる／みねのさはらび」の色紙形を刷る。色紙形には布目押しの丁寧は加工を施し、源氏香をあしらう。

日本橋生まれの江戸っ子絵師尾形月耕(1858~1920)は、独学で画技を習得し、陶器の下絵・蒔絵デザインから本格的な日本画まで、自在にこなした。落合芳幾の**(参考)源氏物語五十四帖**が濃厚に幕末の雰囲気を残しているのに比べると、月耕の近代的造形感覚は明瞭である。

14 絵入源氏物語 乙女 万治3年(1660) 林和泉掾刊 横本 袋綴29冊

紺色無地紙表紙(縦14.7、横21.3糎)の美濃版半截横本。巻によっては、表紙左端に押装の痕跡が残る。中央に楮紙題簽(縦11.1、横3.3糎)を押し、「きりつほ／はゞ幾々」の如く2帖分の巻名を刷り、右下に巻序を付刻する。ただし分量の多い巻は1冊1巻仕立てである。源氏物語の本文25冊、『源氏目案』3冊と『系図』・『山路露』1冊を添え、全29冊。第25冊夢浮橋末尾に「龍集万治三年庚子／除念一日／林和泉掾板行」の刊記。書肆名と年月日とは書風が異なるので、渡辺忠左衛門版が初印であろう(吉田幸一『絵入本源氏物語考』)。

本文の次に「写本云／抑此本者後崇光院宸翰／桃花入道殿下被再治之者也」以下の永正元年7月権僧正の原奥書および「今開板之本者」以下の刊語は、5 絵入源氏物語を踏襲したものの。挿絵もまた、先行の版本に倣う。

展示箇所は乙女巻の六条院西の町。秋好中宮の呼び名にふさわしく、秋に映える植物で修景された中宮の庭を描く。本文では、「中宮の御町をば、もとの山に紅葉の色濃かるべきうゑ木どもを植え、泉の水遠くすまし、遣水の音まさるべき巖立てくはへ、滝落として秋の野をはるかに作りたる」と表現されるところ。

(参考) 源氏物語五十四帖 一蕙斎芳幾 明治14年錦栄堂大倉孫兵衛刊 折本2冊

波文様を型押しした白地紙表紙(縦17.6、横12.0糎)に鶴・若松・水辺等を多色刷り、その中央に紅地題簽(縦12.5、横2.6糎)を押し、子持枠内に「源氏五拾四帖 乾(坤)」と刻す。乾28折、坤27折、全54図。各帖最終折は大倉孫兵衛の出版広告である。その広告中に掲出本も「一蕙斎芳幾画／田舎源氏五十四帖／折本全二冊」と見え、柳亭種彦の『修紫田舎源氏』に由来することを言う。事実各図は、田舎源氏の挿絵を極彩色の錦絵に描き直したもので、小版(縦15.4、横21.7糎程度の画面に葵・源氏香意匠の紅色枠)の刷り物を中央で二つ折りし、繋ぎ合わせて折本に仕立てたのが、現状である。

芳幾(1833～1904)は本名落合幾次郎、歌川国芳に学び、役者絵・美人画を得意とした。明治に入って数多くの挿絵を制作。いかにも文明開化期らしい派手な色調と、江戸趣味の横溢した絵柄が見所である。田舎源氏第5編の歌川国貞描く挿絵に基づき、六条三筋町二見屋の別荘を背景として書き加えた。向かって右の笙を手にする太夫は阿古木、左が若妓むらさき、中央は禿犬吉。若紫巻の約束通り、伏せ籠と逃げた雀をあしらう。

15 十帖源氏 六条院・二条院の図 江戸時代前期刊 袋綴10冊

縹色地に紗綾形・唐草文様を空押しした紙表紙(縦27.5、横19.8糎)、その中央に素紙題簽を押し、「十帖源氏 一(～十)」と刻す。原装・原題簽の美本、惜しいことに最終冊の外題を欠く。掲出本は無刊記。他本に「万治四年卯月吉辰 荒木利兵衛」の刊記を持つものがあって、成立の上限を万治4年(1661)に定めうる。さらに跋文の字句から、撰者立圃還暦の承応3年(1654)まで絞りこめるであろう(渡辺守邦説)。

冒頭に、大斎院選子内親王より物語の新作を求められ、琵琶湖に浮かぶ月を見て須磨巻を構想する有名な紫式部伝説が掲げられ、次いで『源氏物語』本文の抄出、巻末に六条院と二条院の略図・登場人物の系図を載せ、撰者の跋文で締めくくる。手軽に物語り全体を俯瞰出来る便利さも評価の対象だが、何より立圃自身の手になる古雅な挿絵131面によって、『源氏物語』関連版

本中屈指の名品とされる。

撰者雛屋立圃(野々口氏、1595～1669)は雛人形の細工を家業とした俳人で、書・絵画・文章のいずれにも長じた。跋文に「年来心にしめて…物語のよしある所々に絵をかきそへ、我身ひとつのなぐさめ」とする由が示され、作品への深い愛着が自ずから書物の形をとったと言えよう。寛文10年(1670)には姉妹編の『おさな源氏』も刊行され、こちらには120面の絵がある。

展示箇所は、六条院と二条院の図。南を上にするので、現在の目から見ると、ややわかりにくい。『源氏物語』に描かれる邸宅の研究は数多く積み上げられているが、掲出の図はその最も早い例のひとつ。

1 6 源氏物語古系図(巢守三位本)室町時代後期写 折本1冊

鶯色地に金銀の市松文様金欄表紙(縦31.9、横14.6糎)は、古表紙ながら改装か。外題なし。見返しは金切箔蒔きの布目斐紙。本文料紙、間合風の斐紙。横方向に四条の白界を引き、系図書写の目安とする。一部に縦の白界も見える。毎半葉大字8～9行、細字12～14行。朱の系図線・合点・圏点等あり。墨付50折、後遊紙2折。料紙のオモテ面のみ書写する。

「先帝」より「前和泉守」まで23系198名をまず掲げ、次いで「そのすぢともしらぬ人々」「無名」とあって系図は一段落。さらに「きぬの色を人さまによりてさだめたる事」「人々のかたちを花によそへたる事」「居所事」を乗せ、所謂「源氏物語のおこり」で閉じる、特異な古系図。

一般に源氏物語系図は、三条西実隆(1455～1537)の系図制定作業を境界線として、それ以前の系図を「古系図」と呼ぶのが、学界の慣例である。この慣例に問題がないわけではないが、今それに深入りせず、便宜上「古系図」の名称を用いるならば、掲出本は実隆の時代より下る書写と思われるものの、明らかに古系図の特徴を示す。とりわけ注目されるのは、巢守巻の登場人物を載せる点である。かつて『源氏物語』一部として読まれたこともある巢守巻は、現在散逸してしまってその全貌を把握しがたい。断片的な資料を集めて復元を行う時、この系図がかなりの力を発揮するのである。

具体的には、螢兵部卿宮の子と孫に巢守巻の主要人物が書き込まれており、その他、左京大夫・藤大納言・帥中納言の家系にも、巢守巻と縁のある人物が見られる。今回の展示の主題と関わらないことなので、詳しくは久保木秀夫「源氏物語巢守巻関連資料再考」(『平安文学の新研究』)および愚文「源氏物語古系図(巢守三位本)解題・翻字」(『古代文学論叢』18)を参照されたい。

さて「源氏物語洛中洛外」の掉尾は、古系図(巢守三位本)付載の「居所事」。光源氏の二条院・六条院の他、葵上の三条第、明石入道北の方が伝領した桂の山荘、揚名介の五条の家などの簡略な説明を述べる。この記事を持つ古系図は比較的珍しい。

◎解題は高田が担当しました。皆様のご批正をお待ちしております。またご所蔵の資料を提供して下さった各位に感謝します。

(2010.1.18 ver.)